



46:28 さて、ヤコブはユダを先にヨセフのところに遣わして、ゴシェンへの道を教えてもらった。そうして彼らは、ゴシェンの地にやって来た。

46:29 ヨセフは車を整え、父イスラエルを迎えにゴシェンへ上った。そして父に会うなり、父の首に抱きつき、首にすがって泣き続けた。

46:30 イスラエルはヨセフに言った。「もう今、私は死んでもよい。おまえがまだ生きていて、そのおまえの顔を見たのだから。」

46:31 ヨセフは兄弟たちや父の家の者たちに言った。「私はファラオのところ知らせに上って行き、申しませう。『カナンの地にいた、私の兄弟たちと父の家の者たちが、私のところにやって来ました。』

46:32 この人たちは羊飼いです。家畜を飼っていたのです。この人たちは、自分たちの羊と牛と、所有するものすべてを連れて来ました。』

46:33 もしファラオがあなたがたを呼び寄せて、『おまえたちの職業は何か』と聞いたなら、

46:34 こう答えてください。『しもべどもは若いときから今まで、家畜を飼う者でございます。私たちも、また私たちの先祖も』と。そうすれば、あなたがたはゴシェンの地に住めるでしょう。羊を飼う者はみな、エジプト人に忌み嫌われているからです。』

ヤコブの一族は大きかったため、エジプトに入る前にヨセフの誘導をもらうためにゴシェンで待機したのかもしれませんが、またはゴシェンに住むのに良いということを発見したのかもしれませんが、見知らぬ土地ではありませんでしたが、主のご計画に従う者には、主は必ず良い場所を備えてくださるのです。

ヨセフは何度も泣きました。涙も神様が備えてくださった、癒しのための恵です。時には主の前で心を許して、泣いて良いのです。主の前では、または主の与えてくださった信頼できる共同体の中では、強さを装わずに、ありのままの自分を見せることも必要です。そこに真実な交わりが始まり、主のみわざを体験することもあるのです。

エジプト人は早くから農耕をしており、周辺の遊牧民よりも進んだ民でしたし、彼らは周辺民族を見下げる傾向があったようです。民族同士の偏見はどこの世界でも根強いものがあり、それは嫌悪感にさえ発展します。ですからヤコブの一族は「忌みきらわれる」種類の民だったのです。しかしヨセフは大臣という高い立場にありながらも、自分の地位を守ることに固執しないで、自分がその「忌みきらわれる」民出身であることを明らかにしました。

ヨセフは今自分があるのは神様のおかげと信じ、感謝していましたから、その神様が与えてくださった生い立ちや家族を肯定的に受け止めていたはずです。主の与えてくださった自分の境遇を肯定しましょう。感謝し、希望を見出しましょう。

またヨセフは、自分がヤコブの家族であるということはすなわちまことの神を信じる者であるという、信仰のアイデンティティーを持っていました。ですから評判は下がるようなことがあっても、また仕事がやりずらくなるようなことがあっても、「羊を飼う者」の出身であることを隠さなかったのです。恐れて信仰を隠すよりも、神様からの助けをいただいて証しをする者になりたいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

